



## 助成研究者のその後

2023年8月 大隅基礎科学創成財団

大隅基礎科学創成財団は2017年より「独創的で先進的な研究」を追求する基礎科学研究者に研究助成を行ってきました。助成は7年目に入り、その成果を測るにはまだ早すぎるかもしれませんが、第1期から6期までの助成研究者が助成後にどんな成果をあげ、あるいは評価を受けているかを調べたところ、外部の助成団体や学会、企業、公的機関などから新たな助成や表彰を受けたり、所属する大学や研究機関内で評価されて昇進/昇格した人が多く見わかりました。以下にその一部を順不同で紹介します。(データは2023年8月末現在)

### 助成後、他の機関から表彰や助成を受けた研究者



**木俣行雄さん** 第1期(2017-18年助成)  
(奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科 准教授)  
研究課題「Diauxic shift における小胞体ストレスセンサーIre1  
依存性ミトコンドリア伸展に関する研究」

2020年度公益財団法人「野田産業科学研究所」の研究助成に選ばれました。

2023年度公益財団法人長瀬科学技術振興財団から「長瀬研究振興賞」及び研究助成を受賞。

**小田裕香子さん** 第2期(2018-19年度助成)

(京都大学iPS細胞研究所 准教授)

研究課題「生体内でタイトジャンクション形成を制御する仕組みの解明」



小田さんからの報告

「大隅財団からの助成後、10の財団から助成を受けることになり、2022年に第14回京都大学「たちばな賞(優秀女性研究者賞)」を受賞、同年にはそれまでの京都大学医生物学研究所助教からiPS研究所の准教授に昇進しました。現在は学術講演に加え高校生、医療担当者など産業界や行政機関の幹部候補など一般向けの講演も行なっています」



### 白川一さん 第2期 (2018-19年度助成)

(奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科バイオサイエンス領域 助教)

研究課題「植物異形細胞における葉緑体分化抑制の分子メカニズムと生理的意義の 解明」

JST (国立研究開発法人科学技術振興機構) の 2022 年度の「さきがけ」に採択されました。白川さんは大隅財団の助成を振り返って

「本研究費のおかげで優秀な技術補佐員を雇用することができ、研究をスムーズにかつ迅速に進めることができるようになった。同時に研究について考える時間を確保でき、研究に自信を持って取り組み、着実に進めることができた。助成期間の後半に想定していなかった新規遺伝子を発見することができ、また助成期間後には新規遺伝子の機能に関する発見が続き、幸運なことに発展テーマにて新学術公募研究や「さきがけ」研究に採択され、この研究をしっかり進めて行かなければいけないと感じている」(大隅財団ニュースレター第5号)と語っています。

### 加納純子さん 第2期 (2018-19年度助成)

(東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系 教授)

研究課題「サブテロメア機能構築原理の解明」



2020年4月、大阪大学蛋白質研究所准教授から東京大学大学院総合文化研究科教授に昇進。コロナ禍で大学の授業がオンラインに移行した2020年度、大学からオンライン授業「good practice」賞として表彰されました。加納さんは大隅財団の助成を振り返って「(大隅財団に応募当時)私は准教授で日々もがきながら次のポジション探し(厳密に言う、諦めかけていた頃)だった。不思議なことに大隅財団の助成に採択されるや否や運気が上昇し、現所属の教授に着任できた。異動に際して助成金が非常に役立った」(財団ニュースレター第5号)と語っています。



### 水沼正樹さん 第2期 (2018-19年度助成)

(広島大学大学院統合生命科学研究科 教授)

研究課題「代謝が関与する寿命延長機構の解明」

2019年2月に日本学術振興会(JSPS)から第15回「日本学術振興会賞」を受賞。2020年には広島大学大学院統合生命科学研究科准教授から教授に昇進。水沼さんは助成を振り返って

「私が着目している長寿効果をもたらす代謝産物は試薬として大変高額ですが、この化合物を使って解析しようと思ったタイミングで大隅財団の助成に採択していただき、おかげさまで論文として形になり、特許の出願もしました、研究が面白いのはこれで終わりではなく、新たな疑問が生じ、それに対していろんな妄想をし、仮説をたて、解析・検証を進めていくところです。基礎研究を通して産業的貢献もできれば幸いです」(財団ニュースレター第5号)と語っています。

**竹下典男さん** 第2期（2018–19年度助成）

（筑波大学生命研究系 准教授）

研究課題「糸状菌における菌糸生長の屈性の分子機構」



2019年度公益財団法人「野田産業科学研究所」の研究助成に選ばれ、2019年4月に筑波大学生命研究科助教から**准教授に昇進**しました。

竹下さんは大隅財団の助成を振り返って「大隅財団の助成をいただいた当時は准教授に昇進した頃で学生の数も増え、研究テーマが広がっていくときで、自由度の高い研究助成を得て大変ありがたかった。この研究助成に選ばれたことで自信を持って進むことができました」（財団ニュースレター第5号）と語っています。



**若林憲一さん** 第2期（2018–19年度助成）

（京都産業大学生命科学部産業生命科学科 教授）

研究課題「ボルボックス目緑藻の多細胞化・光行動・光防御能の連関」

2019年に**日本生物物理学会**年会 AbiS イメージコンテスト「**知的部門賞**」、21年には東京工業大学科学技術創生研究院 IIR ウィーク優秀発表賞を受賞。2023年4月に東京工業大学化学生命科学研究所准教授から京都産業大学生命科学部産業生命科学科の**教授に昇進**しています。若林さんは助成を振り返って

「任期付き准教授として残り年数を指折数えるような不安な気持ちでいた時、採択していただいたことがどれだけ励みになったかわからない。（大隅財団への）申請課題の論文が受理され、それが機会となって和文誌招待総説執筆、国際会議招待講演等が重なり、さらにそれらが追い風になってようやく別の大学で任期なしの職をいただいた。なんとか研究が続けられそうなのは大隅財団の助成のおかげと心よりお礼申し上げます。基礎研究を取り巻く環境は信じられないくらい悪化しており、大隅財団の助成の意義は年々増す一方。助成をいただいた我々の振る舞いが大隅財団の今後を左右するという緊張感とともに、これからも研究に邁進します」（財団ニュースレター第5号）と語っています。

**佐藤良勝さん** 第3期（2019–20年度助成）

（名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所  
特任准教授）

研究課題「マイクロ流路を用いた植物幹細胞の極性生長の新生誘導とその分子機構解明」



2019年に**日本植物学会**学会賞「**特別賞（技術）**」、2021年に**日本植物形態学会**「**平瀬賞**」を受賞（2016年に次いで2度目）、同年にニコンから「**ニコン JOICO 賞特別賞**」も受賞、さらに2023年4月には「先端イメージング技術を通じた生命科学研究への貢献」が認められて「**文部科学大臣表彰・研究支援賞**」を受賞、その研究は高く評価されています。



**川辺浩志さん** 第3期（2019–20年度助成）  
 （群馬大学大学院医学系研究科薬理学講座 教授）  
 研究課題「神経細胞におけるプロテアソームを標的にしない  
 ユビキチン化を介した細胞骨格制御機構の解明」

川辺さんからの報告

「大隅財団からの助成をいただいたことが高く評価され、2020年にそれまでの神戸大学大学院医学研究科客員研究員から群馬大の**教授に昇進**、また大隅財団の助成を元に発展させた研究計画が大型助成金（公益財団法人**武田科学振興財団の2022年度『特定研究助成』**）に選ばれました。大隅財団には感謝の言葉もございません」



**茶谷悠平さん** 第3期：（2019–20年度助成）  
 （岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域 准教授）  
 研究課題「翻訳伸長の連続性を保証するリボソームトンネル –  
 新生ポリペプチド鎖間相互作用の解析」

公益財団法人 **日本応用酵素協会 2023年度 酵素研究助成**、公益財団法人 **武田科学振興財団 2023年度 ライフサイエンス研究助成**、公益財団法人 **山田科学振興財団 2023年度 研究援助**に選ばれました。東京工業大学科学技術創生研究院細胞制御工学研究センター特任助教から、2023年4月、岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域の**准教授に昇進**しています。



**高岡勝吉さん** 第4期（2020–21年度助成）  
 （徳島大学先端酵素学研究所 准教授）  
 研究課題「哺乳類胚における発生休止の分子メカニズム」

高岡さんからの報告

「大隅財団の御支援で得られた予備実験結果を元に2021年4月からJST(国立研究開発法人科学技術振興機構)の「**創発的研究支援**」、同年10月から同じくJSTの「**さきがけ**」にそれぞれ採択され、さらに2023年4月からはJSPS(日本学術振興会)の「**学術変革領域**」の**領域代表**として採択されました。研究費がなく、途方に暮れていたプロジェクトが大隅財団の支援決定から潮目が変わり、大きな研究費の獲得につながりました。現在、得られた成果の発表を準備中です。本当にありがとうございました」とコメントを寄せてきました。

高岡さんは大隅財団の助成決定後の2020年12月に、公益財団法人千里ライフサイエンス振興財団の「**岸本記念研究助成**」、翌2021年2月には公益財団法人加藤記念バイオサイエンス振興財団よりメディカルサイエンス分野の「**加藤記念研究助成**」にもそれぞれ選ばれています。



**堀沙耶香さん** 第4期（2020–21年度助成）  
（奈良女子大学大学院自然科学系生物科学領域 准教授）  
研究課題「逃避行動を最適化する原型回路の分子基盤の解析」



2021年には**日本動物学会から「川口賞」と「女性研究者奨励 OM 賞」受賞**、2023年8月「線虫のストレス応答行動の性差原理の解析」により、線虫研究の未来を創る会から2023**「ネクストリーダー賞」を受賞しました**。2023年4月にはそれまでの東京女子医科大学統合教育学修センター基礎科学講師から奈良女子大の准教授に昇進しています。堀さんは大隅財団の研究助成に選ばれた時、「『すぐ役立つ研究』が求められる中、基礎科学を賛助する大隅財団の創意に敬服いたします。とともに自分自身の研究人生に自信を得ることができました。大隅財団の自由度が高く、まとまった額の研究助成は現在、独立を目指す身として大変ありがたく、励みになります」（財団ニュースレター第2号）とコメントしていました。



**山崎正和さん** 第4期（2020–21年度助成）  
（秋田大学大学院理工学研究科生命科学専攻 教授）  
研究課題「長年ベールに包まれた未知のPCP制御機構の解明」

2022年に**秋田医学会の「学術賞」、日本解剖学会東北北海道支部の学術集会「学会賞」を受賞**、同年11月にそれまでの大学院医学系研究科細胞生物学講座准教授から理工学研究科の**教授に昇進**しました。山崎さんは助成決定時、「PCP(平面内細胞極性)に関わる遺伝子の異常により、ショウジョウバエの毛の向きは様々な方向へと乱れますが、私はこれまで毛の向きが逆転する現象を複数見出し、その分子機構に関する研究を展開しています。『既存の概念や知識で解釈が難しい現象にこそ、真に面白いことが隠されている』と信じています」（財団ニュースレター第2号）とコメントしています。

**守屋央朗さん** 第4期（2020–21年度助成）  
（岡山大学学術研究院環境生命自然科学領域(農学系) 教授）  
研究課題「過剰発現が有利に働く遺伝子の体系的探索により理解する酵母の耐ストレス生理」



2023年度公益財団法人長瀬科学技術振興財団の**「長瀬研究振興賞」**を受賞、岡山大学准教授から、同大学学術研究院環境生命自然科学領域（農学系）**教授に昇進**しました。守屋さんは助成決定時、「『酵母コンソーシアムフェロー』の称号をいただくことを目標にしていたので大変嬉しい。私の研究ゴールは『酵母を知り尽くす』ことで、何を持って知り尽くしたことになるのか？例えば酵母の生理応答が全部説明可能になることです」（財団ニュースレター第2号）と語っています。



**谷元洋さん** 第5期（2021-22年度助成）

（岐阜大学応用生命科学部 教授）

研究課題「生体膜スフィンゴ脂質の異常に対する酵母の防御応答戦略の解明」

公益財団法人水谷糖質科学振興財団の**2023年度助成**に選ばれました。

同年10月に、九州大学大学院理学研究院准教授から岐阜大学応用生命科学部**教授に昇進**しています。

谷さんは助成決定時、「今回の研究はスフィンゴ脂質が異常になった際に、酵母がどうやって自分を生きながらえさせる対策をとっているのか、を明らかにするものです。この『スフィンゴ脂質の異常に対する救済機構』を通して、新たな方向性からスフィンゴ脂質の未知の存在意義に迫っていきたい」と語っています（財団ニュースレター第4号）。

**瀬川勝盛さん** 第5期（2021-22年度助成）

（東京医科歯科大学難病疾患研究所医化学分野 教授）

研究課題「膜リン脂質の恒常性維持の分子機構」



公益財団法人武田科学振興財団の2022年度「**武田報彰医学研究助成**」に選ばれました。瀬川さんは大隅財団の助成を振り返って

「2021年4月に独立した時、人も実験器具もゼロからの研究室の立ち上げで、何も無い教室で1人立ち尽くしていた時のことが昨日のように思い出されます。JST（国立開発法人科学技術振興機構）やAMED（国立研究開発法人日本医療研究開発機構）の大型トップダウンの科研費に採択されず、どうやって教室を立ち上げれば良いのか途方に暮れていた時に（大隅財団の研究助成に）採択いただいた。真っ暗なトンネルから光が差し込んだような気持ちだった。面白い仕事をして少しでも恩返しできるよう、失敗を恐れずチャレンジいたします」（財団ニュースレター第4号）とコメントしています。



**星田尚司さん** 第5期（2021-22年度助成）

（山口大学大学院創生科学研究科化学系専攻 教授）

研究課題「ヌクレオチド配列選択的に働き、イントロンが回避させる発現抑制機構の解析とその生理学的・進化的意義」

公益財団法人**発酵研究所の2023年度研究助成**に選ばれ、同年度の公益財団法人長瀬科学技術振興財団の「**長瀬研究振興賞**」および研究助成も受賞しました。星田さんは大隅財団の助成を振り返って

「助成贈呈式で大隅財団の基礎科学研究を応援する姿勢を改めて知ることができた。思い切った知的探究に注力したい」（財団ニュースレター第4号）と述べています。

### 井沢真吾さん 第5期（2021–22年度助成）

（京都工芸繊維大学応用生物学系・微生物工学研究室 准教授）

研究課題「酵母を酵母たらしめる優れたエタノールストレス対処能力の多面的解析」



2023年度公益財団法人「飯島藤十郎記念食品科学振興財団 学術研究助成」、2023年度公益財団法人「タカノ農芸化学研究助成財団 一般研究助成」に選ばれました。

井沢さんは大隅財団の助成を振り返って

「寺田寅彦によれば本来、研究者も『好奇心に導かれて愚直に真理を追求する偉大な迂愚者』なのだそうです。問題はいかに好奇心の灯を絶やさぬ様にするか、ですが私自身や日本の研究者にとって幸運だったのは大隅先生や財団が、吹き消されそうになる好奇心の灯を守り勇気づけてくれることだと実感しています。愚直に研究に励みたいと思います」（財団ニュースレター第4号）とコメントしています。



### 加藤太陽さん 第6期（2022–23年度助成）

（島根大学医学部医学科 准教授）

研究課題「新規のヌクレオソーム配置規則から迫るエピゲノム制御の理解」

2023年7月、日本遺伝学会「奨励賞」を受賞。

加藤さんからの報告

「私の研究材料の酵母は非常にパワフルなモデル生物で、少し遺伝子を改変するだけで新しい世界が広がり、深く研究に入っていける。酵母でわかったことは真核生物全体に適用できるのに、問題は『役に立った』、『応用された』が見えにくい点で、そのために研究資金に恵まれない。2022年6月に新しい研究室をあてがわれたものの、環境整備をするお金が乏しく、藁にもすがらる思いで大隅財団に応募したところ、助成を受けることができ、そのことが学部内で大変評価されて助教を1人つけてもらった上に医学部医学生2人が研究室に参加してくれた。研究を進めよ、と大隅財団に背中を押されたものと感謝している。大隅財団からご支援をいただいていることで周囲の期待が高まったように思います。しっかり恩返しできるよう頑張ります」

## 昇進/昇格した研究者

### 助教→准教授

#### ●小田裕香子さん 第2期（2018–19年度助成）

京都大学医生物学研究所助教から2022年京都大学iPS細胞研究所准教授に昇進。

#### ●竹下典男さん 第2期（2018–19年度助成）

筑波大学生命研究科助教から2019年同研究科准教授に昇進。

#### ●茶谷悠平さん 第3期（2019–20年度助成）

東京工業大学科学技術創生研究院細胞制御工学研究センター特任助教から、2023年4月、岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域の准教授に昇進。



**佐藤敦子さん** 第2期（2018–19年度助成）

（お茶の水女子大学 准教授）

研究課題「母性 mRNA の由来の全貌と、その遺伝の解明」

2020 年にお茶の水女子大学助教から同大学准教授兼東北大学大学院生命科学研究科准教授（クロスアポイント）に昇進。

佐藤さんは助成を振り返って

「（私の研究は）世界で類を見ない、予備実験の成果もない、まさに未知への挑戦でした。国の科学研究費（科研費）などこれまでの業績で決まる助成制度からは全く支援を受けられなかった課題でしたが、おかげさまで世界を驚かす成果が出つつあり、その成果は今後、食糧資源確保や生殖医療、新しい実験手法の開発など、さまざまな分野に応用されていくことが期待されます。大隅財団のご支援があってこそその成果です」と語っています。



**山口暢俊さん** 第5期（2021–22年度助成）

（奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科バイオサイエンス領域 准教授）

研究課題「花弁基部細胞の分化による脱離制御機構の解明」

2022 年に奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科バイオサイエンス領域の助教から准教授に昇進。

山口さんは助成を振り返って、「私が花の研究を始めたのも単純な動機でした。しかし研究費を獲得していく過程では、花が作られる理由を解いたところで何の役にも立たないから支援しない、と言われ続けてきました。大隅財団は『大切なのはあなたが何をやりたいか？』という研究者の視点を色濃く反映した支援です。採択いただき心より御礼申し上げます」（財団ニュースレター第4号）と語っています。



**竹内勇一さん** 第6期（2022–23年度助成）

（北海道大学大学院理学研究院行動神経生物学分野 准教授）

研究課題「ニューロゲノミクスによる利き行動制御の解明」

2023 年 4 月、それまでの富山大学学術研究部医学系助教から北海道大学大学院理学研究院行動神経生物学分野准教授に昇進。「人のやらないテーマにこそ価値がある」と「右利き左利き」を分ける淘汰に関わる神経メカニズムを神経行動学、神経科学、ゲノミクスなどを駆使して研究中で、講演会やメディアに積極的に登場、アウトリーチ活動も続けています。



## 講師→准教授

### ●堀沙耶香さん 第4期（2020–21年度助成）

東京女子医科大学統合教育学修センター基礎科学創成講師から 2023 年に奈良女子大学大学院自然科学系生物科学領域准教授に昇進。

## 客員研究員→教授

### ●川辺浩志さん 第3期（2019–20年度助成）

神戸大学大学院医学研究科客員研究員から 2020 年、群馬大学大学院医学系研究科薬理学講座教授に昇進。

## 准教授→教授

### ●若林憲一さん 第2期（2018–19年度助成）

東京工業大学化学生命科学研究所准教授から 2023 年 4 月、京都産業大学生命科学部産業生命科学科の教授に昇進。

### ●加納純子さん 第2期（2018–19年度助成）

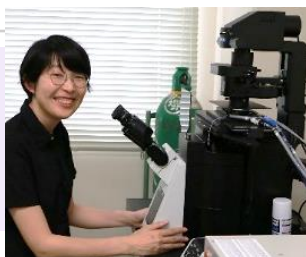
大阪大学蛋白質研究所准教授から 2020 年、東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系教授に昇進。

### ●水沼正樹さん 第2期（2018–19年度助成）

2020 年に広島大学大学院統合生命科学研究所准教授から同科健康長寿学研究室教授に昇進。

### ●吉田知史さん 第3期（2019–20年度助成）

研究課題「細胞内 ATP の可視化によりエネルギー恒常性の基盤を解明する」  
早稲田大学国際学術院准教授から 2020 年に同大国際教養学部教授に昇進。



### 稲田のり子さん 第3期（2019–20年度助成）

（大阪公立大学大学院農学研究科応用生物科学専攻 教授）

研究課題「クロマチン構造制御における細胞核内アクチン繊維の新規機能の解明」

大阪府立大学生命環境科学域准教授から、2021 年 4 月に大阪公立大学大学院農学研究科応用生物科学専攻の教授に昇進。

稲田さんは助成を振り返って

「2018 年に大阪府立大の准教授として着任、自分自身の研究グループを立ち上げ、翌 2019 年に大隅財団の助成に採択していただいた。2021 年に教授に昇進しましたが昇進審査もスムーズだったのは大隅財団の助成金獲得の後押しがあってこそだと信じています。助成金で購入した高性能顕微鏡（長年の夢でした！）で今後も発見を積み重ね、大きな成果につながるよう努力を続けていきたい」（財団ニュースレター第3号）と述べています。



**増田真二さん** 第3期（2019—20年度助成）

（東京工業大学生命理工学院 教授）

研究課題「紅色細菌をモデルにした硫化水素・ポリスルフィドの代謝とシグナル変換機構の解明」

東京工業大学生命理工学院准教授から、2023年に教授に昇進。

増田さんは大隅財団の助成を振り返って

「私が学生だった頃『若手向けの研究費に応募できなくなった今が一番辛い』と指導教員がよくぼやいていた。他人事と思っていたら、私もその方の年齢とほぼ同じになっていて研究費の獲得に四苦八苦、さらに任期が後5年、後のない状態。大隅財団からの支援を受けられることになった際は精神的にとても救われた。この支援のおかげで研究を継続でき、関連研究者と学術変革領域の立ち上げを進めることができた。何より私自身、テニユアトラックへ移行し（この歳で？）研究をもうしばらく続けることができることになった。同じ境遇となりうる若手研究者の道を拓き、基礎科学研究の重要性を広く世にアピールすることで、大隅財団と本支援金を援助してくださった方の期待に応えたい」（財団ニュースレター第3号）と述べています。



**原雄二さん** 第3期（2019—20年度助成）

（静岡県立大学薬学部 教授）

研究課題「骨格筋幹細胞の「First Division」を制御する機構の解明」

京都大学大学院工学研究科准教授から2021年4月より静岡県立大学薬学部教授に昇進。原さんは大隅財団の助成を振り返って

「私は特に幹細胞において物理的な力を感じ取る機構がいかに幹細胞の機能に関係するかに興味を抱き、大隅財団の助成研究においてその一端を明らかにした。研究のみならず人事においても非常に大きなお力添えをいただき、大隅財団の採択者ということで、（静岡県立大教授への）異動において非常にインパクトがあったと伺っています」（財団ニュースレター第3号）と記しています。

● **山崎正和さん** 第4期（2020—21年度助成）

秋田大学大学院医学系研究科細胞生物学講座准教授から2022年、同大学院理工学研究科生命科学専攻教授に昇進。

● **守屋央朗さん** 第4期（2020—21年度助成）

岡山大学大学院生命科学研究科異分野融合先端研究コアシステム細胞学研究室准教授から2023年、同大学学術研究院環境生命自然科学領域（農学系）教授に昇進。



**野村真さん** 第6期（2022—23年度助成）

（京都工芸繊維大学応用生物学 教授）

研究課題「化石人類特異的なアミノ酸変化によるヒト表現型進化の再構築」

京都府立医科大学大学院医学研究科神経発生生物学准教授から2023年5月、京都工芸繊維大学応用生物学の教授に昇進。（京都府立医大とはクロスアポイントメント）

●**谷元洋さん** 第5期（2021–22年度助成）

九州大学大学院理学研究院化学部門准教授から2023年10月、岐阜大学応用生命科学部教授に昇進。

教授→学長



**塩崎一裕さん** 第3期（2019–20年度助成）

（奈良先端科学技術大学院大学 学長）

研究課題「栄養シグナル伝達経路による細胞の高温増殖制御」

2021年4月から奈良先端科学技術大学院大学教授から学長に就任、2022年4月からは専門分野である「酵母遺伝学フォーラム」の会長も兼務。

助成を振り返って

「米国での研究生生活が長く、帰国後、日本流の研究費申請の書き方に馴染めなかったこともあって大変苦労していた折、助成をいただいた。『独創的』と評してくださったのは大隅財団を除いて他になかった。その2年後に思いがけず大学長を拝命し、研究者の時とは違った視点で日本の研究環境や高等教育について考える立場となりました。産業界や市民への働きかけを通して基礎科学に対する理解の視野を広げ、文化としての科学が発展する土壌を日本に実現する活動を続けておられる大隅先生と大隅財団に敬意を表します。私も微力ながら貢献できるようでしたら幸いです」（財団ニュースレター第5号）と述べています。

## その他の活躍

●**加納純子さん** 第2期（2018–19年度助成）

（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系教授）

2022年11月には**東京大学の広報誌「なぜ、から始まる学術入門」**に登場、「どうして一卵性双生児でも違う部分があるの」との疑問にわかりやすく回答したり、同月の日本分子生物学会のホームページで女性研究者のキャリアパスについて対談、財団法人テルモ生命科学振興財団の中高校生向け「生命科学 DOKIDOKI 研究室」に取り上げられたり、文字通り「科学を文化に」根付かせる活動を積極的に続けています。

●**若林憲一さん** 第2期（2018–19年度助成）

（京都産業大学生命科学部産業生命科学科教授）

2023年にはH.Lodish 他著**「分子細胞生物学」**（第9版、東京化学同人）の訳者の1人として参加。



### 和田正三さん 第2期 (2018-19年度助成)

(東京都立大学 名誉教授)

研究課題「葉緑体アクチン繊維による葉緑体運動機構の解明」

教え子のお一人、東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系准教授の末次憲之氏の東京大学教養学部報の着任挨拶文(2021年)の中で「私は着任までほぼ20年間ポスドクでした。・・・それでも『しっかりした論文を書き続けていれば、そのうち人は認めてくれる』と言う師の**和田正三先生の言葉を信じ・・・**」と記されています。和田さんは2021年9月に日本植物学会、2022年には日本植物生理学会のそれぞれ名誉会員になっています。

和田さんは大隅財団の助成について

「定年退職後の人も対象にしてくださった大隅財団の理念は本当にありがたい。日本では定年退職は強制的で、研究場所がなければ科研費は申請できない。研究を継続してくれる後継者のいない研究者は研究を中断せざるを得ない。私も2018年に遂に科研費不採択で科研費で借りていた室を返さざるを得なくなり3月に自分が主催する研究室を閉めた」

「とはいえ継続中の実験を止めるわけにもいかず、共同研究者やかつての同僚の場所、機器、労力をお借りして共同研究を続けているが、自分の研究室や研究費がなくなると共同研究者の研究室に行く旅費、時には機器の使用料、論文の掲載料など、研究・発表を続けるためにはかなりの費用が必要で、年金生活者にとっては自費負担は厳しい。同じ思いの退職者はたくさんいるはず。幸い、私は大隅財団の助成金のおかげで研究を続けられたが、定年退職後の研究者のサポートシステムを切に望みます」(財団ニュースレター第1、5号)とコメントしています。



### 松尾亮太さん 第3期 (2019-20年度助成)

(福岡女子大学国際文理学部環境科学科 教授)

研究課題「ナメクジが脳で直接光を感知する分子機構の解明」

ナメクジの脳研究で知られる研究者ですが、2020年5月に一般人向けに「**考えるナメクジー人間をしのぐ脅威の脳機能**」を出版しました(さくら舎)。ヒトのわずか10万分の1程度の神経細胞しか持たないナメクジの脳が持つ高いポテンシャルを分子生物学、組織化学、生理学、行動学などの手法を用いて研究を続けています。

大隅財団の助成に採択された意義について

「ギリギリだった研究予算に初めてゆとりができた。物価上昇と大学の校費削減の中でも研究ペースを落とさずにすみ、責任著者として3報の論文を記すことができた。大隅財団の助成金があればこのピンチは乗り越えられなかったと思う」(ニュースレター第3号)と振り返り、その3年後には

「おかげさまで研究はその後さらに進展し、現在はナメクジは目で得られた光情報と脳で感知した光情報が脳内でいかに統合されているのか、といった問題に取り組んでいます」(財団ニュースレター第5号)と語っています





### 正井久雄さん 第3期 (2019-20年度助成)

(東京都医学総合研究所 所長)

研究課題「Cdc7-ASK(Dbf4)キナーゼの動物個体レベルでの機能の解明」

2022年9月から研究所において一般の人を対象にした「**老化と健康**」と題した**オンラインセミナーシリーズ**をほぼ毎日行い、10月からは第2クールを開催予定です。

正井さんは2019年の助成決定時に

「私は60歳で最年長受領者の1人であったと思います。研究費の申請をしてもなかなか思うように採択されない状況に、不甲斐なさや歯痒さを感じておりました。そんな時に(大隅財団の助成に)採択していただき、嬉しさから自分の実力不足も顧みず、若い方に負けないパワーを見せたい、などと宣言してしまい、今も思い出すと恥ずかしい限りです」(財団ニュースレター第3号)と語っています。

### ●山崎正和さん 第4期 (2020-21年度助成)

(秋田大学大学院理工学研究科生命科学専攻 教授)

2022年度発表した論文に掲載されたデータを基に作成した動画が「**2023 Drosophila Image Award**」の2nd Runner Upに選ばれました(秋田大学医学系研究科 鮎川友紀 講師と共同で作成)。

\* Drosophila=ショウジョウバエ

詳細は、秋田大学のHPをご参照ください。

<https://www.riko.akita-u.ac.jp/whatsnew/r5/5020.html>

<http://www.med.akita-u.ac.jp/topics/20230818.php>

### ●井沢真吾さん 第5期 (2021-22年度助成)

(京都工芸繊維大学応用生物学系・微生物工学研究室 准教授)

**夢ナビ talk 番組**(talk.yumenavi.info)で「微生物が支える豊かな食文化と健康長寿社会」と題した講演を行い、3分弱(ハイライト版)&約30分の動画の中で微生物研究の魅力を高校生らに訴えました。



### 月原富武さん 第5期 (2021-22年度助成)

(兵庫県立大学理学研究科 特任教授)

研究課題「精密結晶構造解析によるチトクロムc酸化酵素の作動機構の解明」

2023年に**瑞宝中綬章**を受賞。

月原さんは大隅財団の助成を振り返って

「(研究)寿命が2年伸びたと実感しました。我々の説は長く受け入れられませんでした。なんとか哺乳動物の酵素の仕組みとしては認められるところまでできましたが細菌等の酵素では否定されています。既報の構造を検証して我々の説の妥当性を示したいと考えています」(財団ニュースレター第4号)とコメントしています。



## 寄付趣意書

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団  
理事長 大隅 良典

私は図らずも 2016 年度ノーベル生理学・医学賞を受賞致しました。以来、海外も含めて沢山の様々な方々から祝意と励ましをいただきました。特に、基礎科学に対してこれまでになく多くの人の関心が寄せられていることは私自身の大きな励みとなっています。一方、日本人の受賞が相次いでいることに浮かれてばかりはいられない状況が今の日本にはあります。端的に言えば今後も日本人の受賞がこのまま続くかという、はなはだ心許ない状況あります。最近このままでは急速に日本の研究力が低下していくことが客観的にも明らかになってきています。私は日本の基礎科学並びに大学に対する支援が必要であることを訴えて参りました。このたびの受賞を機に、基礎科学振興への期待を単なる一過性のものに終わらせず、継続性のあるシステムの構築を目指すことを願い、多くの方々のご協力をお願いする決意を致しました。

科学とは知的好奇心に基づく人間の活動の一つであり、本来人々の精神活動を豊かにする文化の一つとして位置づけられるものです。日本では科学と技術が科学技術という一語で語られますが、西欧ではお互いに独立した存在として考えられています。勿論、科学が進歩し、技術へと応用され、逆に技術の進歩が科学の進歩を促進するという関係が益々加速されて来ています。技術の進歩は我々の生活を大きく変化させる時代を迎えており、人間社会の将来を見据えた科学的な思考が益々重要になっています。

日本では歴史的に国立大学・国立研究機関が科学の振興に大きな役割を担ってきたこともあり、私も含め多くの大学人は、科学は国が支えるものであることに疑いを持たずに来たように思います。しかし科学の振興が国家の重要な政策になったのは歴史上古く最近のことです。諸外国、特にアメリカでは、大学の運営費に公的資金が占める割合は日本に比べると遥かに低く、民間からの寄付や企業、財団の資金が大きな役割を担っています。また、米国では財団のサポート以外に、個人の寄付も非常に大きな貢献をしています。米国では税制上の違いもありますが、基礎科学を支える文化が根付いている点が、日本と大きな差として現れています。

日本の大学はこの 10 年ほど恒常的な運営資金である運営費交付金が毎年削減された結果、大学は大変貧しい状態に陥っています。安定的な講座費が廃止され、全ての研究費や運営資金までがプロジェクト的な競争的な資金となり、大学運営を長期的な計画として進めることが困難になっています。一方競争的な資金は競争が激しく、短期間で成果が求められてきた結果、挑戦的な研究や、長期間を要する基礎研究は大変厳しい状況が生まれました。その結果、大学の研究力が低下し、若い世代に深刻な影響を与えています。

第一に、教授、准教授は忙しく会議や大学運営、研究費獲得のための書類書きに追いまくられ、現実に研究時間は確実に減少しています。多くの大学で若手研究者の新規採用が困難な状況となり、正規の職員が減少し、多くの若手のポジションには任期が付きました。この事実は Nature にも取り上げられました。5 年の任期で、3 年目に評価され、4 年を過ぎると次の職を探さねばならないことになり、腰を据えた研究は非常に難しくなりました。一流誌に論文を書くことが研究者として確立するために重要な条件となり、研究者は流行の課題に取り組む傾向が助長され、挑戦的で長期的な基礎研究は避けざるを得ない状況となっています。

生物学分野では、1つの准教授、助教の公募に200人ほどの応募があることが常態化しています。このような事態は学生、大学院生に大きな影響を与え、大学と研究者への魅力が減退してきています。その結果、大学院博士課程進学者が減少し、定員に満たないという状況が生まれています。ますます大学の研究力と、若者の研究マインドの低下を招き、次世代の育成、科学の継承を考えると極めて深刻な事態に立ち至っています。

日本では近年効率がより強く求められるようになり、科学研究にも短期間での見返りを求める雰囲気が強くなっています。その研究は何に役立つのかがすぐに問われます。これは基礎研究者にとって痛手となっています。自然科学上のブレークスルーはすぐに役に立つ研究をとという発想からは生まれません。むしろパラダイムシフトを引き起こす発見は、思いもよらない、一見何の役に立つのか分からない研究から発することの方が歴史的にも遙かに多いことが明らかです。

研究費の効率的運用が叫ばれ、バラマキを廃止して少数の研究者への集中化が進んできました。その結果、多くの優れた、独創性を秘めた研究者が研究費を取れず研究を進められず、急速に研究の裾野が小さくなっています。尖った高いピークは大きな裾野なしには生まれません。今地方大学の研究環境の劣化は急速に進行しています。

一方、日本の企業と大学の関係は、私の周辺領域では、以前よりも希薄になっているように感じています。グローバル化が叫ばれる中、企業の資金の多くが海外に向けられています。大学では上に述べたような深刻な財政難から企業との連携が叫ばれています。しかし大学における研究の意義が十分吟味されることなく、企業における研究との差別化も図られず、結果的に大学の研究の弱体化を招いています。その結果日本の大学に対する企業の期待が益々小さくなり、共同研究の空洞化が進行しています。いまこそ、大学と企業との連携の新しいシステムが必要となっており、それが双方の研究力強化に必ずや貢献すると考えます。

勿論国の研究教育予算の抜本的な増額が望まれますが、いまの窮状を打ち破るためには、一刻も早い変革の第一歩を踏み出すことが必要です。私は、国や公的機関、財団などの資金では、支援が難しい課題に対して、現場の研究者の目線に立った多様な試みを進めたいと考えています。それは、単なる少数の研究者の支援に留まらず、研究の原点を問い直すきっかけとなると考えています。基礎生命科学が目指す生命の根本原理の解明は、人類の共通の財産として広く共有されるべきものですし、真理に対する感動、飽くなき知的好奇心こそが未来の社会を支える原動力だという認識が拡がることが重要です。したがって、本財団の活動が大きく育てば、現在の萎縮した大学の雰囲気が改善の方向に向かう大きな流れの第一歩になると考えています。日本でより優れた独創的な研究が創出され、若者が研究の楽しさを実感することで、持続的な人材が育つと考えます。それが引いては企業の研究力を高め、知財をも生み出すことになると信じます。また短期間の製品開発をめざす共同研究から脱して、真に有効な大学と企業のより有機的なつながりを強める活動を進めたいと思います。

私は、この間多くの大学人、企業家と議論を重ね、基礎科学を支援する財団の立ち上げを決断致しました。そのためには、多くの現場の研究者の結集と、財団を支える個人、篤志家、企業による支援が不可欠です。また高い見識を持ち公正な判断のできる研究者の結集が必須の条件となります。

本財団は、これまでにない新しい社会実験ですが、日本の現状に危機感を抱き、基礎科学の発展に期待と使命感を抱かれる皆さまのご支援をいただけることを心からお願い致します。

2023年9月吉日



# 大隅基礎科学創成財団5年間(2017-2022)のあゆみ

## 1. 寄附・会費収入

個人寄附 3億4600万円 延べ約1400人  
 法人・団体寄附 1億2597万円 延べ219社  
 法人・団体会費 1億8270万円 会員企業27社

累積計 6億5468万円

正味財産 3億1499万円 (2022年7月末)

## 2. 研究助成 第5期採択分まで

基礎科学 (一般)	36件	総額1億7670万円
同 (酵母)	16件	5800万円
計	52件	2億3470万円

(応募者総数555人、約10倍)

※創発セミナー、小中高生との集い、市民講座合わせて延べ8300人にリーチ、寄付をいただいた個人、企業、団体合わせると1万人を超える方々が財団活動を認知し、支援し、活動に参加

## 3. セミナー/コンソーシアム

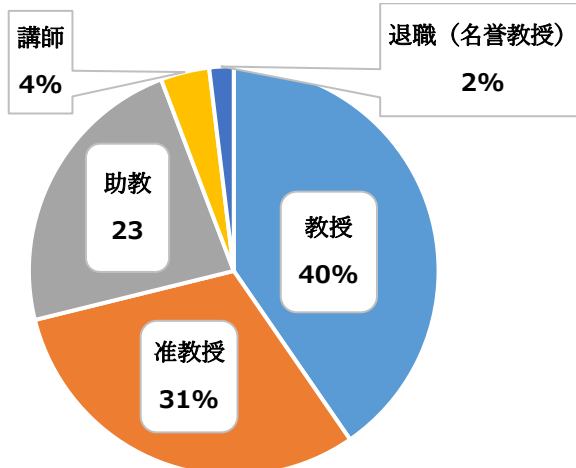
- ・ **創発セミナー**：  
オンライン含め36回開催、講師58人、毎回100-200人、延べ5000人以上の参加者を得た。
- ・ **小中高生と最先端研究者とのふれ合いの集い**：  
開催都市は小田原、東京、京都、広島、川口、姫路の6都市、講師12人、科学体験ブース出展/団体、参加者総数2300人。
- ・ **市民講座**：  
3回(千葉、オンライン2回)開催。参加者数各200人前後。
- ・ **微生物コンソーシアム**：  
参加13社/4研究グループで、これまで定例会52回、全体会6回開催。

## 4. 広報

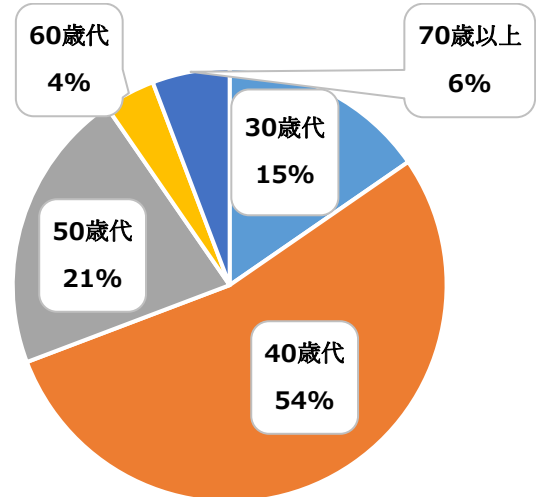
- ・ **記者会見**：「博士課程修了者の企業就職に関する調査結果」発表 (2020/年 1月)
- ・ **ニューズレター**：4回発行
- ・ **Twitter**：活動情報を随時投稿
- ・ **出版(理事長)**：「未来の科学者たちへ」 (2021/11)  
「役に立たない研究の未来」 (2021/ 2)

## 助成採択者 (第1-5期) のプロフィール (いずれも応募時)

### (1) 役職



### (2) 年齢



### (3) 所属する大学・研究所 (人)

奈良先端大 5、東工大 4、東大 3、京大 3、名古屋大 2、早稲田大 2、広島大 2、兵庫県立大 2  
 お茶の水女子大 2、  
 静岡大、高知工科大、浜松医科大、筑波大、藤田医科大、首都大学東京 (東京都立大)、  
 大阪府立大 (大阪公立大)、群馬大、静岡県立大、県立広島大、福岡女子大、信州大、岡山大、  
 新潟大、徳島大、東京女子医大、金沢大、秋田大、京都工芸繊維大、九州大、山口大、東京医科歯科大、  
 琉球大、北大、阪大、東京都医学総合研究所、国立遺伝学研究所 各1 計 36 の大学/研究機関

当財団は「先進性、独創性に優れ」、「国や公的機関による助成がなされにくい」、「任期切れ、定年等で継続が困難」などの基礎研究を助成してきました。過去5年間の助成採択者のプロフィールを見ると、年齢では40歳代が半分近くを占めていますが、役職では比較的若い助教クラスから定年退職した名誉教授研究者にまで広がり、所属する大学/研究機関も一部の総合国立大学に偏ることなく全国各地36もの大学/研究機関に散らばっているのが特徴です。



〒226-8503 神奈川県横浜市緑区長津田町 4259 S2-16  
 公益財団法人 大隅基礎科学創成財団  
 TEL: 045-459-6975 FAX: 045-459-6976  
 E-mail: info@ofsf.or.jp URL: www.ofsf.or.jp  
 発行責任者 大隅良典

